

ロー・ダニエル著

# 『竹島密約』

小針 進

## I 本書の目的

「竹島（韓国名・独島<sup>ドクト</sup>）問題は、いつ噴火してもおかしくない休火山のマグマのように、日韓関係の底流に潜んでいる」——本書のプロローグにある言葉だ。本書は1954年生まれの韓国人の筆者が日本語で書き下ろした研究成果だが、的を射たこうした表現の数々に驚かされる。2006年、筆者は研究者として中曽根康弘元総理にインタビューした際、竹島密約の「真相を究明してほしい」と言われ、日韓間で最も敏感だといってよいテーマに対して、中立性と客観性を保ちながらのリサーチを決意したとあとがきで書いている。

本書のタイトルにもなっているその「竹島密約」とは、日韓基本条約の正式締結（1965年6月）の5か月前、自民党の党人派の代表格・河野一郎と韓国の国務総理・丁一権（当時）の間で結ばれた秘密の取り決めをいう。「竹島・独島問題は、解決せざるをもって、解決したとみなす。したがって、条約では触れない」を骨子とし、日韓国交正常化のために領土紛争を永久に「棚上げ」という密約だ。本書はこの密約に至るまでの過程の全貌を文献調査と関係者へのインタビューを通じて明らかにすることを目的とし、その密約の記録（用紙）がどこに眠っているのかにも考えを巡らせている力作である。

## II 本書の概要とその意義

プロローグ、エピローグ、あとがきのほか、本書は5章（第1章：暗中模索の時代、第2章：叔父と甥の対日外交、第3章：新しい日韓ロビー、第4章：竹島密約、第5章：二つの喪失）で構成されている。評者による若干コメント（意義）を加えながら、その概要を示すと次の通りである。

第1章「暗中模索の時代」では、韓国が李承晩時代の日韓関係と竹島の扱いを描いている。いわゆるサンフランシスコ講和条約（1952年）には「日本国は、朝鮮の独立を承認して、済州島、巨文島及び鬱陵島を含む朝鮮に対するすべての権利、権原及び請求権を放棄する」（第2条）とある。竹島が言及されていないこの条文こそが、竹島を日本領とする日本側主張の最大の根拠になっている。こうなったことのプロセスを本書は明かす。中ソを相手とする冷戦が展開するなか、太平洋地域における戦略的価値を持つ日本の立場を配慮するよう米国が他の連合国側に要請したことが決定的だった。また、「領土争いの対象にならない『対馬』について領有権を主張する大統領」と、「首相をはじめ外務省が一体になって『理論武装』していた日本」が、「あまりにも対照的な風景だった」とする。ハンス・モーゲンソーのリアル・ポリティックス論を引き合いに出して、「竹島問題の政

治的起源は日韓の国力の差にあったと言うしかない」と、韓国人である筆者は冷静である。

第2章「叔父と甥の対日外交」では、1961年に軍事クーデターによって登場した朴正熙政権による対日「請求権」問題の処理を描いている。叔父とは朴正熙であり、甥とは金鍾泌（朴正熙の姪の夫、KCIA初代部長）を指す。「日本との絆を結ぶべく素早く動いた」という朴正熙とその命を受けた金鍾泌の動き、そのカウンターパートとなった池田勇人、大野伴陸、大平正芳らの動向をここでは克明に検証する。周知のように「請求権」問題は日本から韓国への「経済協力」という形で落ち着いた。ここに至る道程には、日韓両国指導者の相互間の人間関係や相手国への認識が反映されていたことが、本書で紹介されている次のような公式・非公式の発言からも想像できる。「私の血にも韓国人の血が混ざっているかもしれない」（岸信介）、「日本にとっては、ある意味では中国問題よりも韓国のほうが重要だ。なんといっても、韓国は<sup>おおくにぬしのみこと</sup>大国主命以来……」（池田勇人）、「未熟な小生をよろしくご指導ください」（朴正熙）、「日本と韓国は親子の関係のようなものだ」（大野伴陸）。

「当時の日韓外交が国と国とのあいだの交渉でありながら、大野のような特定の人物が韓国の利益を代弁していたということである。これが『癒着』か否かという論争は別として、領土紛争を定める『竹島密約』はこのような環境があったからこそ可能だったと思われる」という筆者の主張が、きわめて納得できる方法で検証されている。

第3章「新しい日韓ロビー」は、「河野一郎 - 丁一権」のラインを指す。韓国では金鍾泌が国内の政局で一時的に失脚し（1963年2月）、日本では大野伴陸が死去した（64年5月）

からだ。64年から65年の日韓国交正常化に向かうプロセスでの最大の課題は竹島問題であった。これに代わって稼動した「河野一郎 - 丁一権」ラインの動向が描かれる。

外相でもない河野一郎がなぜ日韓ロビーの主演となったのかという問題を筆者は設定する。筆者は、竹島密約で活躍する金鍾珞（金鍾泌の兄）と嶋元謙郎（読売新聞記者）へのインタビューなどから、中川一郎や宇野宗佑の暗躍にも触れ、河野一郎の「登場」を望んだのは韓国側であると解き明かす。「日米関係を重視した自民党内の官僚派は米国政府の要請もあって、日韓国交正常化に積極的だった。一方の党人派は消極的だった。こうした党内事情を察知した韓国の首脳部は、党人派への急接近を急いだ。河野一郎が日韓正常化条約の『裏のまとめ役』を果たす背景はここにあった」とその理由と背景を明解にしている。

第4章「竹島密約」は、その密約が韓国経済人の邸宅で1965年1月に合意されたことを生々しく検証している。「宇野は河野が用意した紙を出して丁に読み伝えた。丁は日本語がよくわかる。河野が用意した紙は、A4の普通の用紙をタイプした四、五枚だった」と、嶋元謙郎の記憶をもとに描く。そもそも、「自民党政権は一貫して竹島問題を国際紛争として位置づけ、国際司法裁判所に付すという立場を守った」が、「朴政権は『独島の話は国交正常化のあと』でやるとのスタンスをとっていた」ため、交渉は平行線をたどった。最終的には、「未解決の解決策」ともいえる内容で合意となる。筆者はこれをグレハム・アリソンが示した3つの意思決定パターンのうち、第一モデル（合理的行為者）や第二モデル（組織過程）よりも、第三モデル（政治）が強く働いたからだ、と、妥当な判断

をしている。

第5章「二つの喪失」は、密約の合意を記録した「紙の喪失」と、「解決せざるをもって、解決したとみなす」という「精神の喪失」を意味する。前者に関しては、朴正熙政権が消滅し、強権的な全斗煥政権が登場する過程で「歴史の逆賊という烙印を押されることを恐れた」とし、「私が燃やした」と金鍾珞が証言したことを筆者は明かす。後者に関しては、「日本の外務省と韓国の外務部がまるで年末の挨拶状のごとく、『竹島はわが領土』、『独島はわが領土』と主張する口上書を『交換』しながら、それを無視する慣行を守ってきた」のに、「歴史清算」の立場に立つ金泳三政権の登場によって崩壊してしまったと論ずる。前者のような新しい史実の証言を得た意義は大きく、また後者は適切な指摘である。

### Ⅲ 評価と争点

これまで述べたことと重複する面もあるが、つぎの5点で本書を高く評価できる。

第1は、盧武鉉政権が2005年8月に公開した日韓基本条約に関する秘密公文書を活用している点である。日韓外交史研究として先駆的といつてよい。この膨大な記録を用いた研究は韓国の国民大学校日本研究所などでも行われはじめているが、日本で出版された単行本としては、この記録を検討文献に加えた初めての考究であるかもしれない。それだけに興味深い史実が浮き彫りにされている。たとえば、「金部長は第三国の調整に任せるのはどうかと示唆した。大平外相はそれは考慮に値する案だとしながら、第三国としては米国を指摘して研究してみると述べた」という駐日韓国代表部の秘密報告の紹介がそれである。

第2は、公開されたばかりの秘密公文書だけでなく、刊行された多様な既存文献から要人の発言や当時の社会状況を炙り出している点である。「河野（一郎）氏は、独島は『国交が正常化されれば互いに譲ろうとしても、貰おうとしないくらいの島』という面白い表現をされました」と韓国の高官が発言し、「竹島はさほど価値のない島です。日比谷公園くらいの広さで、爆破してなくしてしまえば問題がなくなるでしょう」と日本の高官が応じた発言録を韓国の刊行物（李度晟『実録・朴正熙と韓日会談』寒松、1995年）から引用しているかと思えば、日本の女性週刊誌（『女性自身』、1963年12月23日号）に掲載の「読者アンケート」から河野一郎が「尊敬する政治家」の1位に選ばれたことも引用している。

第3は、二国間関係を表面的な外交関係やパワーポリティックスだけで論じず、両国の国内事情を正確に把握したうえで、日韓間の独特な人脈で物事が決まっていることを浮き彫りにしている点である。植民地統治時代に教育を受けたことを背景に韓国側要人が日本語の話者であったこと、日本側要人も他の外国人とは異なり韓国人には愛憎半ばする感情を持っていたことなどは、「竹島密約」の背景となった。また、矢次一夫や児玉誉士夫といったフィクサーへの言及があるが、戦後日韓関係史は、裏社会が及ぼす政治・外交への影響を無視して語ることはできない。つまり、「合理的な判断」以上に「人間的なつながり」が通用する二国間関係だったということを見事に描いているのだ。

第4は、竹島密約に立ち会った嶋元謙郎と金鍾珞への直接インタビューから歴史の空白を埋めている点である。机上の文献分析では得られない成果があったことはもちろんだ

が、インタビューにかかわる手間は大変であったと思う。

第5は、竹島関係の研究書にありがちな民族主義的主張が全編で一切ない点である。日米に留学経験があるとはいえ、排外的な市民団体が外交アジェンダで過激化する様子を例に、「韓国社会が人質になりつつある」と自国で近年起こる事象を冷静に見つめる視点も筆者は持つ。

最後に、本書の争点を1つだけあげておきたい。本書のエピローグに「先人の『知恵』をいかにして受け継ぐか」というサブタイトルが付してあるのだが、竹島密約は「先人の知恵」と見るべきなのか、それとも、「時代の便宜主義」と見るべきなのかである。

筆者は、「紛争を棚上げし、その解決を次世代にまかせよう」との尖閣列島に関する70年代の鄧小平発言を挙げ、これよりずっと以前に日韓の首脳はこうした発想を持っていた点を評価している。「国交がない時期に互いに歩みよろうとした人々の努力の跡をたどろうとした」、「竹島密約を生んだ日韓の政治文化の特徴（空気）は『浪花節的』という言葉で形容するのがふさわしいのではないか」という、筆者の意図や考えを評者も共有する。

ただ、密約は密約であって、それが持つ責任回避性や秘密主義性はついてまわる。日本

では2009年に自民党から民主党への政権交代が実現し、日米間の核持ち込み密約を裏付ける文書が確認された。1960年の日米安保条約改定時に、核搭載の米軍艦船や航空機の日本寄港・通過を事前協議の対象から外したとされる密約だった。「核戦争の恐怖が現実のものだった東西冷戦下の『知恵』だった」という声が外務省関係者からはあるが、国民を欺いていたという批判は免れないとの報道が主流だ（『時事通信』、2009年11月21日など）。

そもそも、日韓基本条約は両国間の経済協力と安全保障を第一義とし、双方の相手国に対する歴史認識を封印して締結した。韓国にとっては軍事独裁政権下での妥結であったことを考えると、政権交代が重ねられ、国力もついてくれば、この間のわだかまりが噴出し、密約をめぐる「精神の喪失」が発生するのやむを得ないとも思う。

竹島密約の記録（紙）に関して、「私はどこかに記録があると考えている。日本人はなにごとにつけ、記録を残す人々である」と筆者は書いている。重要な指摘である。日米間の核持ち込み密約だけでなく、竹島密約が外務省から「発見」される日も遠くないかもしれない。

（草思社、2008年11月、A5版、278ページ、1,700円〔本体〕）

（こはり・すすむ 静岡県立大学）